
銀魂 魔王襲来篇

クロフォード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂 魔王襲来篇

【Zコード】

Z7349E

【作者名】

クロフォード

【あらすじ】

ある日の江戸で、天人最硬の体を誇る“玄武族”が江戸を自分たちのものにしようと、計画を企てていた！銀さんを含む万事屋ファミリーはある男に依頼を受け、玄武族と戦うことになる。一方真選組は、近藤、土方、沖田の三人が最近怪しい行動をしている玄武族の拠点を調べに行く。しかしこの後、銀時・近藤が捕まり、土方・新八が重軽傷を負い、残された夜鬼、神楽と真選組随一の剣術の使い手沖田は手を組み、二人だけで玄武族の拠点に乗り込むことになる。

メガネキャラはダメキャラかつていうと案外みんなダメキャラだつたりする（前）

初めて書くことになりました銀魂。

僕はこの作品は神がかっていると思ひのです。

初めて見たときに何気なくノマニックを手にとつてしまつてそれから
ハマりだしました。
どうぞ見てください。

メガネキャラはダメキャラかつてこうと案外みんなダメキャラだつたりする

とある田の万事屋

今日も、朝早くから新ハがグータラな一人を起しこじました。

「神楽ちゃん、朝だよ起きてー。」

「うへへん……酢昆布ウウウウウ……

「まひ銀さんも起きてください」

「うへへん……何言つてんだよかーちゃん、今日は土曜だぜ……ジヤンプは明日だあ」

「誰がかーちゃんー?寝ぼけてないで早く起きてください銀さんー!」

いつも通り、朝からジシコモを入れる新ハ。

「新ハ~」

「あ、神楽ちゃんせつと起きた」

「私 酢昆布切らしてゐの忘れたアル ひみつとお前買つてー」
ヨ、ゴルマ」

「なんで僕パシリみたいになつてゐの?・なんで上から田線?・

「新入りが口」たえすんなヨ セツセと賣つてこいやパシリの新ハ

「んだと「コルア！…僕はパシリぢやないぞ！…僕にはシッコリ」とこ
う大事なポジションがあるんだよ！…」

「比率にすると8・2アル！」

「え？何それ？百歩譲つても ツツコミ8 パシリ2 だよね？」

「お~い 朝からウルせーなあ」

「あ、銀さん」

「銀ちゃん」

「神楽あ セツキのは言いすぎだぜ 新ハはメガネという大事うな
ポジションがあるんだぞ」

「おいなんだよメガネって メガネなめんなよコハ」

「でも銀ちゃん よく考えるネーどんな漫画でもメガネはダメキヤ
コハー」

「おーそづだな」

「テメーら メガネを全否定かアアアアア！…テメーらそんなにメガ
ネがキレイか？それとも僕がキレイなのか？僕の存在価値を全否定
してゐるのかアアアアアアアア…！」

「じゃ メガネのパシハ君 僕はアイスで」

「おイイイイイイイー！！誰がパシハだアアアアー！！しかもちやつか
り注文してんじゃねええええー！！」

「新ハ 廁の紙も切れてるネ 酢昆布のついでに買ってこい」

「いやトイレットペーパーのついでに買つてこいつて言えよやー」

そして、新ハは仕方なく買い出しにいくのでした。

「まつたく……あいつら……ただすら依頼が無くてお金が無いの
に……」

新ハがそう愚痴をこぼしながら階段を上つていると、後ろから大男
がきた。

「もし……あなたは万事屋の方ですか？」

「え、はい そうですが」

「実は……」

「銀さん！…大変です…！」

「あ、新ハ！酢昆布買つてきたか？」

「どした新ハ？メガネが割れたか？」

「違います！依頼人です！！」

「――」

「いやあ、お兄さん！今日はまだビリしてこんなところへ。」

「銀さん！依頼ですってば！」

「おお そうだったな で どんな用で？」

「はい……あれは先週のことでした…… 私は朝の犬の散歩が日課なんですが……その日に限つてあんなことが起きるとは……！」

「何があつたんですか？」

「あなた方は“玄武族”を知っていますか？」

「玄武族？」

「玄武族つて、あの天人最硬の体を誇る玄武族ですか？」

「そうです……あいつらは幕府が用意した江戸の端にある城を拠点としているんですが、私はあいつらが来る前からその辺りを散歩し

ていました。しかしその日、私はバッタリと酔っ払った玄武族に会つてしましました。私の犬はとても利口で、ヒモ無しで散歩させていました。私の犬はその酔っ払った玄武族の所へ走つていって、いました。私は必死で呼び止めました。しかし私の犬はその玄武族によつて捻り潰され……ウツウツ」

「グスッ……兄ちゃん……私もペットが死ぬその痛みわかるアル……」

「神楽ちゃんの場合ペットを殺しちゃった痛みじやん」

【バキ！ドカ！バキ！】

「ギヤアアアアアアアーーー！」めんなさいーーー！めんなさいーーー！」

「そんじゃ兄ちゃんよ、依頼つてのは、そいつらに觸を入れてくればいいんだな？」

「いや違つネ 銀ちゃん 抹殺アル！」

「お前 もうすでに一人抹殺してんじゃねえか」

「頼みます……私のペットの敵かたきをとつてください……！」

「私に任せるとコロシ！絶対にワン公の敵とつてくれるアル！」

「で……でも相手は玄武族だし しかも幕府の御墨付きですよ」

「気にすんなつて 僕たちは万事屋だ なんでもするぜ」

「こぞ 出陣ネ！ いくよ定春ーー！」

「わんーー！」

「あーちょっと待つてください銀さんー！」

ドタバタと万事屋から出て行く一行。

そのころ真選組屯所では

「最近 天人の玄武族の一部が窃盗から殺害まで怪しい動きをしているという情報が入った そこで 松平のとつとんからの指令でこれから拠点に向かう 大人数での行動はこちらも避けたい そこで トシと総悟 お前らはこれから俺について来てもらう」

「ウス」

「わかりやした」

「他の者は 僕たちのいない間 真選組を頼んだぞ」

「はい わかりました！」

「よし 行くぞ」

「よつしやーー！」それでジャンプ読み放題だぜーー！」

「冷房18度にしよーぜ！」

「おい部屋締め切らーゼ！」

「快適だ～～～！！」

「お、これ畠の刀じゃね？」

ホントだ。おれがお前を扶おうとする

おしゃがへん負せへへへ……
土方ハナ　下　一四

お! 大丈夫かよ そんなことして!」

「大丈夫」のベン水性たから

え！？それ油性だそ！？」

「は？ウソオオオオオオ！お前ゴンギーさんの…？ゴンお前のせ
いだぞ！！！」

「いや書いたお前だろー！」

隊士たちがギャーギャーやつていて、一方、近藤たちは

「あ そうだ、屯所に刀忘れてきた」

「トシ早くしりよ」

「スンマセン近藤さん」

「まつたく……なにやつてんだ、士方は、近藤さんこんな奴置いてこいやしょーよ。こんな奴連れてつても足手まといになるだけである」

「近藤さん刀貸してくだせよ。ここつのはぶつた斬つてやります」

「ここから早く行け、トシ！ 総悟も何も言つない」

「ふあ～氣持け良～」

隊士たちがくつろいでいるところ、急に扉が開いた。

【ガラガ】

「ん？ 寂……」

士方の前にはなんともまあ、隊士たちのだらけた姿があった。

「……哩~~~~~！？」

「ねこ……おめでとうござりだ? テメー、何してやがるへ。」

「ち
違ひんです聖堂……」されば……

土方は隊士の言い訳も聞かず、自分の置き忘れた刀を拾おうとした。

「おこむ」

「ち……違います」「イツが……！」

「全員そこになあれ……俺が一人ずつ肅清してやらあーー！」

メガネキャラはダメキャラかつてこうと案外みんなダメキャラだつたりする（後

いろいろな指摘をお待ちしています。

銀魂はいろいろと面白い発想、捻りが無いと書けない作品なので、「つまらない」と思われても仕方ないと思っています。

どうか暖かい眼差しで見守ってください。

よく考えたら俺の人生って空回りばかり

銀時率いる万事屋一行は、江戸の端にある玄武族の拠点である城に着いた。

その城は、大木に囲まれて暗く 薄気味悪かった。

そこには、人間が見てはならない、とてつもない何かがあるような感じがした。

「銀さん これ……本当に行くんですか」

「カラスがメツチャ飛んでるアルーこっち睨んでるマー。」

「あー ごめん新ハくん 神楽ちゃん 僕ドラマの再放送予約するの忘れてたわ てことで あとよろしく〜」

バイクで帰ろうとした銀時。

「定春 追うネ」

「わんー。」

【がぶりー】

「ギャアアアアアアーーー！」

「銀さん これ……本当に行くんですか」

「カラスがメツチャ飛んでるアルー」ひし睨んでる王一。

「よし 行くぞお」

「でも銀さん どうやって進入するんですか?」

「進入? そんなみみっちい事するかよ 男なしさこせこぞうじつ
胸を張つて正面から行くんだよ おい神楽」

「アイアイサー! ほあちやああああーーー!」

【ド、「オオオオオーンーーー】

神楽のキックに、城の門はいとも簡単にぶつ壊された。

「定春ー 寄り道しないで家に帰るんだ王一ー

「わんー!」

「よし 行くか

「よし じゃないでしょー」「へ ちよつ まつ 銀さんー!」

その「ひの近藤たちは

「よし もろもろだな さて……どうやって入るか 正当方じや追い帰されるだら……」

「やつぱり 裏から侵入するしかねーよ

「いや しかし もしそれで入れたとしても 奴らが黒だという証拠もなかつたら 我たちの首が危うくなるぜ」

そのとき先頭を歩いていた沖田が立ち止まつた。

「近藤さん ビツヤり手間が省けたようですが

「ん? 何だ総悟?」

「この通り 何者かによつて門がぶつ壊されてしまつた

「…………」

「なにがあつたんだ こりゃあ

「しかもこのバイク 見てくだせえ

「こつち 万事屋のじゃねえか あいつ 何しに来てんだ?」

「とにかく 入るが

そのころ銀時たちは

「おい新ハ これ調子のつてパンポンしないで入っちゃつたせいか
？」

玄武族の兵たちに囲まれていた。

「マズイですよ銀さん……みなさんメッチャ怒りますよ」

「みんな角生えてるアル！」

「お主らは何者だ？まさか あの事が外部に漏れたか
？」

「あの事？なに オタクラ世間に見せる」との出来ない事してんの

「…………… 何も知らない用だな オ前らなんの用だ」

「…………… 奴ら全員ぶつ殺しへきたアル！覚悟する…【ガツ…】
い、つ…」

「バカヤロー！何 オ前本当のことを言つてんだー！」

「曲者だ…！殺れHHNHNH…！」

「うよオオオオオオ…！銀さん みんな襲つてきたア…！」

「チッ……とりあえず…【ガツ】」

銀時は身構えした。

「逃げるぞオオオー！」

「えエヒヒヒヒヒー？　ちよつ 戦うんじゃないんですかー！？」

「バカヤローー！いくらなんでも一日酔いの銀さんじや この人数相手はキツイつーの！」

「銀ちゃん 根性無しネ！根性無い銀ちゃんは ただの天パーヨー！」

「お前天パー ナメんなよ！天パーはなあ 天パーはなあ……あれだよ…とにかくすげーんだよ天パーはー！」

「まつたくす”くねーよー天パーに比べりや メガネの方がすげーよー！」

「　いや それは無い　」

「なんだよお前らー！…息ピッタリじゃねーかー…さつきまで言い争つてたじyanー！」

「絶対に逃がすなアアアアー！」

「キヤアアアアアー！…の人たち 僕たち殺す氣ですよーー！」

「とにかく 逃げろオー！」

「あー あいつら万事屋じやねーか こんなところにいたよ

「あひ 本當ほんとうですか 【ガシャ】 - 発入れますか」

「いや待て 総悟そうご あこづら なんか追われてたぞ」

「……」

「……まあ 倭あ万事屋倭事屋に借りがあるからな ……助けてやるか

「俺もでさあ 結構万事屋の旦那おとつねに世話よきわになつてんでもわあ」

「やつこいつと思つたぜ じゃあ 加勢かせいに行くとするか」

そのころ城内監視室

「ほお……あの娘……懐かしい顔おほほじゃのう……惜しいのう……ワシ
が直々に成敗せいばいしてやりたいのう……」

『岩慶丸いわけまるよ……聞きこえるか?』

「はつ……豪菊王ごうぎくおう様……」

『主の申していた娘とは まさか あやつか?』

「左様さやうで御座ございます」

『では あの白髪男の腰に差しているものか 妖刀ようとう“星碎ほくさい”か』

「左様で……」

『ふむ……岩慶丸よ……』

「はつ！」

『主は武者修行中に一度敗れたと言つてたな

「恥ずかしながら……」

『うむ ではチャンスをくれてやる 主が奴らを片付け 妖刀“星碎”を奪つてくれるのだ どうだ? 借りを返すと共に 名誉も得られるぞ 行く気になつたか?』

「はつ！ 有難き幸せ……」

『では 行つてこい』

「はつ……（フハハ……良い機会が得られたものじや……妖刀“星碎”を奪つたら わしにこの世で敵^{かな}う敵は居ない いくら“魔王”と恐れられた豪菊王でも 星碎には敵わん^{アレ}んだろう……）

密かに悪巧みをする岩慶丸……。

そして、玄武族の兵たちに追われる銀時たち。

それを追いかける近藤・土方・沖田。

この後、一体どうなるか……。

よく考えたら俺の人生って空回りばかり（後書き）

『玄武族』・『古慶丸』は、『銀魂』ミシク第五巻』の第35訓
『慌てるなー クーリングオフというものがある』で一度出てきました。

「おーのーの会社にも裏がある

城内を逃げ回り、拳銃の黒て追いつめられた万事屋一行。

「おーのー ヤベーンじゃねーの?」

「だからセツアマツサゲ行ーいつて言つたんだ僕はアーー!」

「とにかく闘うしかないヨ 銀ちゃん」

「仕方ねえ やるか」

しかし、その瞬間。

【ドォォン】

と、爆発が起きて、多数の玄武族が瞬く間に吹っ飛んだ。

「なーー!?

「あ、あこつらはー」

「田那ア 手伝いに来やしたぜ!」

「なーー?なんでお前らがー!?!?ー?」

「何者だお主!?!?」

「オレたちか?オレたちや 真選組だ」

「真選組だと！？幕府の犬が何故ここに！？」

「3人だと？フン 合わせても6人か… たつた6人で何が出来る
というのだ？構わん やつてしまえ！！」

「うおおおおお…」

【ザシユ！ズバ！バキ！】

「なんだこいつらー？やけに強いぞ！」

「たつた6人にやられるな！ いっせいに斬りかかれ！」

倒れても倒れても起き上がる玄武族。

それはまるで不死身の侍。

「くつ… 斬つても斬つてもきりがねえ！」

銀時たちが苦戦しているとき、玄武族たちの後ろから一人の大男が現れた。

「おおー！やつと来たぞ！あの御一方が！」

「なんだあのバカでかいやつらは？」

二人を見た銀時は、ハツと何かに気付いた。

「…！ あれは…！」

「天誅ううう！ 幕府の犬ども そして そここの侍ども そこにな
おれ！我らが天罰を下してやる！」

「我らは 武を誇る傭兵部族 茶吉尼よつへいーそしてワシの名は鬼雲おにぐもー！」

「そして狼鬼おつわきー！」

「おいおい どつかで見たことあると思つたら ここから煉獄関れんじくかんの
時の鬼野郎じゃねえか」

「たぶんそうですね… でもなんで 玄武族と茶吉尼が？」

「つべこべ言つてねーで 鬪えテメーらー！」

「くつそーこんな数相手じや 拉致があかねーよー！」

そのとき、鬼雲・狼鬼、一人の後ろから岩慶丸が現れた。

「ふはははー娘えお前はここで終わりだー！」

「ー？ 誰アルかー？」

「ふはは 自分より弱い者は覚えとらんと言つておるのか？しかし
それは星碎ほし砕が有つた為！ワシの手で潰したかったが、娘 お前は今
ここで死んでもらおう」

「退け」

その時、鬼雲と狼鬼が動いた。

その自慢の金棒を振り回し、玄武族もろともぶつ飛ばす鬼雲。

「ぐまえー。」

「ぎゅあああああーー。」

土方と競り合ひつ玄武族が言つた。

「お 鬼雲ーー仲間に当たらなによつてしるーー。」

「仲間？ワシは主らを仲間と思つたことは一度も無い。ワシらは豪菊王に忠実に従うだけだ」

「なんだとー？」

そのとき、狼鬼はその長槍で土方と競り合ひつ勇もろとも、土方を貫いた。

「ガはー。」

「ぐあー。」

「トシイイイーー。」

【ズボ】

「ゲホ！ゲホ！」

「どうやら土方は急所は外れたようだった。」

「フン、どうやら命拾いしたようだな」

そして、鬼雲の金棒が新ハに当たった。

「ぐはつ！…」

2、3人の玄武族を巻き添えにした後に当たったため、威力は半減していたが、それでも新ハにはかなり堪えた。

「新ハイイイイイ！！」

「神楽！新ハを担いで逃げろー。」

「でも銀ちゃん私闘うワー。」

「バカヤロー！ 新ハの容体が悪化したらどうすんだー早く行け！』

「でも銀ちゃ

「早く行け！…」

「………」

神楽は新ハを担ぎ、思いつきり走った。

その時、岩慶丸が神楽の前に立ちふさがった。

「おつと 待て。」（こ）を通りたいなら、わしを倒してから…

「退くアルウウウウ！－！」

神楽の傘が火を噴いた。

【ズドードードー！】

「なに！？なんだ！？クソ！逃がした！」

神楽は出口を求め、走つていった。

「総悟！お前もトシを担いで行け！」

「…分かりました近藤さん…… どうか 死なないでください 旦
那も……」

「おひ

【がしつ】

「……！」

そして、総悟も神楽たちを追いかけるように走つていった。

「待てえ！小僧！」

狼鬼が長槍を投げよじとした。

「待て！」

その時、近藤がその長槍をつかんだ。

「（……動かん）」

「これ以上俺の仲間に手を出したら、この近藤勲がゆるさねえ」

近藤はパツと長槍を離した。

「フッ　おもしろい……ではやってみるがいい」

「畜生じゃねーか」「リラ　オレもだよ　俺も仲間に手を出すヤツは
ゆるさねー！」

「こべれ

「おつ

一人はいっせいに斬りかかった。

そのころ、神楽に迫いついた沖田。

「おー！チャイナ　てめーそのバカ力で壁かべぶつ壊せ　そっちの方が早
い！」

「……お前に言われたくなかったけど　そんなこと言つてる場合じや
ないネ」

「はやくしろ！」

【ドーナオオノー！】

「よし
行くぞ」

そして、沖田・土方・神楽・新八は無事、城から抜け出した。

【ドオオーン】

「なんだ!?」

「ふつ　あいつら上手く抜け出せたか？」

銀時が一瞬気を緩ませたその瞬間。

【ヨシ】

『アガル』

「旦那あ！」

近藤も銀時に目をやつた瞬間。

[エッジ]

「ゲンツ...」

【デサツ デシャツ】

「おこ 殺すなよ こいつらを豪菊王様の下に持つていくんだ」

「ぬう つまりん」

「ん? これは真剣じゃー星碎ではない!—!—」

実は、神楽が木刀を持つていた。

そして、それに気付いた沖田が、銀時と別れ際に握手と見せかけ、自分の真剣を渡していた。

「ぬう やられた……まあいいわ そいつらは牢屋にぶち込んでビナ

「…承知」

【ガシヤーン】

「イテト……」

「やつと起きたか銀時」

「ハコハ… ああ、そうか 僕立ち捕まつたのか

「どうやつらのやつだ」

「…………やつりまつた…!」

銀時は悔せむに悔せんだ。

そのころ、鬼雲・狼鬼は。

「狼鬼……いつまであこつに従つもつだ？」

「ふん あいつも俺たちと回り 星碎田淵でだ 上手く利用すれば
星碎はワシらのものになる」

「やうか ならいいんだが あの男 ワシは気に食わないな」

そのころ吉慶丸は。

「申し訳ありません 星碎 を逃がしてしまいました。

「なんだと？」

「しかし その仲間は捕らえました 捕聞でも何でもして 必ずや
居場所を聞き出します」

「早くしろ 時は一刻を争つ 幕府の連中にばれてしまつ前」

「ハツ」

そして、神楽たちは病院に着いた。

『Jリーグの会社にも裏がある（後書き）

茶吉尼は、『銀魂』ミシク第六巻の『第四十三訓 男はみんなロマンティスト』と『第四十四訓 刀じや斬れないものがある』で出てきました。

絶対に入るなと言われると入りたくなるけど あれって何でなのかな

大江戸病院

【ウイーン】

「お出できた」

「先生 新八はどうですアルか?」

「ええ メガネの方はそこまでの傷ではありません。一週間入院すればほぼ完治するでしょう。しかし、真選組の方は命に別状はありませんが、肺を貫かれています。普通なら息絶えてもおかしくないのですが、奇跡的に…はい。完治するまで2ヶ月ほどかかります」

「2ヶ月……」

「新八は大丈夫アルネ?」

「先生エ 土方あいづにどごめさしてくれって言つたじやないですか」

「え?いや 君何言つてんの?あれ本気だつたの?」

「新八はこの中ネ?」

「あーちょっとまだ入らないで!」

「先生…俺はいったん帰るんで ヤツを頼みまさあ

「ああ はー」

そして沢田はやや瞳孔開き気味で病院を後にして、真選組に帰つた。

「新八元氣かー?」

「ハ…神楽ちゃん…そこ折れてるから…乗らなこで…」

「気にすんなつて お礼なんていらないπ」

「お願ひ…どうで…」

「新八早く銀ちゃんとのじこじこハピー。」

「いや まだ無理だからね…」

「そんなこと言つてると 銀ちゃん死んじゃハピ ホラ【グイ グイ】」

「イタタタタタ!ホラじゃなくて神楽ちゃん…イタイ!イタ…【ゴキッ】
ギヤアアアアアアア!…」

新八の入院は2週間延期したらしい。

帰り途中の神楽。

「あ～あ 追い出されちゃったよ 定春う～新ハも銀ちゃんもいな
いし これからどうするアルか」

「わうん……」

「助けに行きたいけど…… 銀ちゃんは必ず帰つてくれるネ 私信じ
るネ 定春も一緒に待つよネ？」

「わん！」

「よ～し 定春 家までダッシュユね！」

「わん！～」

神楽と定春は、途中でベンチに座るグラサンを撥ねたが、気にせず
笑顔で帰つた。

真選組屯所

今、沖田がちょうど戻つたところだった。

「わ～びっくりした 隊長お一人ですか？」

「あ 沖田隊長 もう戻つたんですか？」

屯所は荒れに荒れ、スナック菓子だけに室温は17度、そして今まで隊士が隠し通してきた、ジャンプやピンク雑誌の山。

「どうか？隊長も」「一緒にへつらわませんか？」

「いや……いい

「沖田隊長っ…びついたんですか？浮かない顔して……」

「なんでもねえ

すると、少し隊士たちに不安の顔が出てきた。

「もしかして…団長たちの身に何かあつたんですか？」

山崎の一言で、屯所内は静まり返った。

「…………寝るわ

「ちよっとちよ…隊長ー何とかいつくだせー隊長ー団長たちはどうしているんですかー！」

「沖田隊長ー隊長オオオオオー！…」

【パターン】

「（…………近藤さん…びつかい無事でいて下され…………）」

その日、沖田は不安な顔をして床に就いた。

神楽はそのこと…。

【ちしちしちしづ……】

聞こえるのは時計の音だけ。

いつもの騒がしい万事屋はそこには無く、神楽と定春だけその部屋にいた。

上に騒がしいのがになると、お登勢さんもキャラサリンも何か異変に気付いたし、万事屋に上がってきた。

もう今日が沈みそうだった。

「……銀時はどこだい？ まったく……また無茶しに行つてんのかイ？」

「ウン……でも すぐに帰つてくる 銀ちゃんはー！」

「そりゃい……なんだかアタシはとても不安なんだがね……」

「な……何言つてるアルか！」

「オ登勢サン 私モソウ思イマス アノヒトハ 簡単ニ死ヌ人ジヤナイ」

「だれも死ぬとは言つてないだろ？ただ不安がするだけさ……家賃も滞納してるしね」

「任せるアル！帰つてこなかつたら私が連れ戻してくれるアル！」

「フン……じゃあ良いこと教えてやるよ」

「？ 何アルか？」

「お前らに依頼を頼んだ大男いだだろ？アタシはあれが店の前を通つたとき 何か気になつてたんだよ そしたらさつき思い出してね…… お前ら 玄武族の連中に手を出したんだろ？」

「！ 何でそれを？」

「お前に依頼したあの男……かつて天人の“魔王”と呼ばれた兇悪なかなりの強者だよ アイツが玄武族のボスさ」

「な……マジでか！？」

「一人じゃ絶対にかなわないよ 突っ込むのは勝手だが 死んじゃ元も子もないよ ……じゃあな」

【ガラララ…パタン】

「…………アイツが元凶だったなんて……銀ちゃん…無事アルか…」

その日、神楽は不安な顔をしながら床に就いた。

そのころ、牢屋・拷問所では。

「オラー…さつさと吐こちまいか！」

【バチ！バチン！】

「グツ…ガハ！」

「オラー！」

【バチイイン！】

銀時・近藤は拷問をかれこれ30分受け続けている。

「ぐアアアアーー！」

【ガクンー】

「ふう…………さつさと吐けばいこものを…」

そういうて、拷問吏じとうぢりが部屋を出ようとしたときだつた。

「銀時…………！」

「待てよ…………」

「…？」

「ふつ……もう終わりか？もつとキツイのが良かつたなあ 僕は

「…フン 後悔させてやろ！」

【バチャイー・ビシイー】

「ゲホア！……ハア ハア……俺たちはなあ……ぐア！……ゲホ！…ハア 絶対エ誰にも斬ることのできねえもので繋がれてんだよ…こんなところで テメエらなんかにくたばってたまるかよ！」

「口数の減らないヤツだな……」

「それは俺たちも同じだ むしろどうした？俺にはもう終わりか？これじゃお妙さんのパンチの方が効いてるぜ？」

「ならば その口開かないよつこにしてやろ！」

【ズバチャイインー】

「そうだ 岩慶丸……万事屋だ」

「は？」

「万事屋に行け あそこにならヤツの仲間もある ならば星碎も一緒にあらう！」

「万事屋…ですか」

「時間は無いが 明日にしてくれ」

「しかし豪菊王様 明日は江戸で行事が行われる様で……派手なことも進入もなるべくなら避けた方がよろしいかと……」

「なに? こんなときに…仕方ない 明後日の明朝に行くんだ」

「はー」

そして夜が明けた。

誰かを護るために人は生きる

朝早く、沖田総悟は刀鍛冶を嘗む鉄子のもとへきていた。

「どうでえ鉄子さん 昨日頼んだ俺の刀はできてるかい?」

「ああ あと少しだ タ方までには完成するさ 今まで一番の出来になるとと思う 使い易さは保障する」

「ほり あとすこし磨きを入れれば完成だが……」

「これか……」

【スラッシュ】

沖田が抜いたその刀、日の光に照らされ白く輝き、また日の光に照らされ赤く激しい炎の様に燃ゆる。

「その刀 艶が半端じゃないだろ? 切れ味も抜群さ なんせ昨日からずっと磨き研ぎ続けていたのだからな 名前は“白炎龍”と言つたところだわ!」

「白炎龍……なるほど その名の通り 真っ白だわ しかも切れ味は良さそうだ それに振りやすい このまま使つても良いぐらいだでもなんで白炎なんでえ?」

「その刀 少し向きを変えてみると良い」

「え？　うめー。」

「どうだ？」

「すげーわ　あんたやつぱすげーよ　刀が燃えている様に見えます
あ

「氣に入ってくれたみたいで良かつたよ」

「ありがとう」わこまわあ　じや　田が暮れたらまた来ますんで
俺の刀お願ひします」

「はいよ」

そして総悟は刀を鉄子に渡して歩いて刀鍛冶を去った。

まつたく同じく、万事屋の神楽は。

いつも新ハに起しけれなれば起きない神楽が、今日も珍しく自分で、しかも朝早く起きたのである。

「早く起きあがいたネ……やるじが無いアル

神楽は戸を開め、また布団に潜った。

「…………」

「……………」

「……………」

「うがアアアアアアア――！」

【ドォン】

神楽は戸を蹴り飛ばし、駆け足で銀時の部屋に行つた。

【ドォン】

さうに戸を蹴り飛ばした。

「銀ちゃん帰つてこないじやん！何があつたアルか！？銀ちゃんの
身に何があつたアルかアアアアア――！まつてろ銀ちゃん 今行くか
う」

神楽はバタバタと着替え、戦闘準備に入つた。

「よし 行くか 定春 おいで」

「ワン」

そうして、神楽は万事屋の扉を開けた。

扉を開ける途中、神楽は玄関の前に誰かがいることに気付いた。

神楽は見たことがある服からスッと顔を上げていった。

そこにいたのは、沖田だった。

「つかひ」

「なにアルか？」

「チャイナ……お前これからどこへ行くつもりだア」

「お前には関係ないネ そこ退くアル」

「ちょっと待て」

「何アルか 私は酢昆布買いに行くだけだ」

「お前…………あそこにいくつもりだ」

「…………だつたらどうするアルか？止めるのか

「やめとけ 死ににいく様なもんだぜイ」

「昨日から銀ちゃんが帰つて来ないアル」

「俺もだ 近藤さんがあれつきり帰つて来ねえ」

「じゃあお前もいくあるか？」

「お前はバカか 死ににいく様なもんだって言つただろ」

「…じゃあお前は銀ちゃんやゴリラを見殺しにするアルか？銀ちゃんも「リラも私たちをかばつたんだヨー！私たちをかばつてまで闘つてるアルヨー！たつた一人でヨー？もしかしたらもう……ふつ」

その神楽の口を手で塞いだ沖田。

「それ以上言うな あの一人はあんなやつらに殺られる人たちじゃねえ それは俺たちが一番わかつていなきやいけねえだろ」

「離すネ！そんなこと百も承知ネ！でもお前みたいに仲間を放つておけるほど私は馬鹿じゃないアル！」

「つるせイ だまれ」

「銀ちゃんたちの行動を無駄にする気アルか！？お前みたいに仲間を大事にできないヤツなんて そんなヤツに誰も護ることなんてできないアル！」

「だまれって言つてんだア！…」

【ビクシ】

珍しく大声で怒鳴る沖田に神楽は驚いた。

「俺が仲間を大事にできないって？誰も護れないって！？ああ そうかもしだねえ！！でもなあ 僕みたいなヤツを護ってくれる 仲間として大事してくれれる人がいるんだよ！お前もそうだろ！！その俺たちが死んでも誰もよろこばねーんだよー！」

神楽はしばらく黙り込み俯いていた。

それを見た沖田は神楽に言った。

「……あこひらの……玄武族の強さは半端じゃないんだア しかも茶吉尼も手駒としてる 認めたくなーが俺たちなんかが闘つても勝てる相手じゃねえ」

「…じゃあどうするアルか」

「理性を取り戻せ 落ち着いて考えろイ」

「……とつあえず中に入るヨロシ」

「いいのかイ こつも俺を嫌ってるガキ娘が」

「ハヌセコタル 仕方ないヨー今闘えるのは私たちしかいないネ!..」

「あくまで闘う気か」

「他に手があるアルか?」

「いや 交渉しても絶対聞いてくれないだろーしなア 裏から忍び込んでもこずれは見つかるだろつ あそこの警備は江戸の大使館で上のほうだからな」

「……なにアルか お前も結局裏から忍び込むとか考えてたアルか

「だが ただぶつかりに行つてもやられるだけだ それと このことはあまり幕府には知られたくないねえ 幕府が動きだしたらこんな苦労しなくとも簡単に事は済むんだが そしたら俺たちの行動もバ

しる そしたら切腹もんだぜ」

「なんとか考えるアル」

「でも お前らなんで昨日あわい元へ。」

「……変な男に依頼受けたアル ペット玄武族に殺されたとか言つて 敵を取ってくれ言われたアル」

「…そつか」

「まだ続きがあるアル その依頼した男 玄武族のボスだつたネ」

「お前ら会つたのかイ！？よく生きて帰れて……」

「違つアーナのことはババアに聞いたアル」

「だがしかし なんでお前らこいつ」

「たぶん……あの 茶吉尼の後ろにいた玄武族のヤツネ あいつ前に私が持つてた銀ちゃんの木刀を欲しがつて……」

「……まあ とりあえず ここの後どうするか話やう」

「ウン……」

神楽と総悟はそのあと作戦を考えた。

どれもボツだつた。

そつしてゐる間に毎過ぎになつた。

「腹減つたアル……私 金持つてないヨ 新ハが万事屋の金取り締
まつてゐるヨ お前何か買いに行けヨ」

「あいにく 僕ア 金は持つてねえんでイ」

「死ぬアル……」

「…チツ 仕方ねーなア ちょっと台所借りるぜ」

「ちょ 何する氣アルか?」

「俺が何か作つてやる」

「えー?」

「安心しろイ 僕も早くから親を亡くしてゐるんでイ 少しは料理は
できりア」

その言葉の通り、沖田はたんたんと料理をしていく。

その後姿を神楽はボーッと見ていた。

そうしてみると、神楽は自分の異変に気づいた。

「（何で私アイツを家に入れてるアルか？なんで親しげに話してるアルか？なんで料理してもらってるアルか？なんで……熱いアルか？）」

その時、沖田が料理を持ってきた。

「ほりできたぜ」

「おお

意外に美味そうだった。

「あんな食材で よく作れたアルなあ」

「美味しいかどうかは保障できねーが…どうだ？」

【パク】

「ん~……さすがに美味しいね」

「そうか」

「でも…… 今日はアリガトネ」

「？」

沖田は少し驚いた。

神楽も俺にそんな事を言つのか。

そんな顔をするのか。

そう思つた。

「これ食べたら また作戦考えるアル」

「わかつてりア」

やつして一人はペロリと食した。

そしてじょりく寝転がつた。

「ゲフッ そういうえば お前なんで刀持つてないアルか？」

「ゲフッ あ？ ああ そうか だからお前曰那の木刀持つてきた
のか」

「さつきの事アルか？」

「ああ 僕がなんで刀もつてないかって? 曰那に俺の刀を貸したか
らだよ

「マジでかー?」

「おかげさまで一本無くしちまつたよ」

「無くしたつて決め付けるなヨー。銀ちゃんはたぶん まだお前の刀持つてるネ！」

「それならいいが まあどうせあの刀はもう必要ねエんディ

「どうしてアルか？」

「昨日帰つてから ジッソリ刀鍛冶のところに行つて新しい刀を用意してくれるよう頼んだんでイ そして今朝ここに来る前に行つたら夕方にできるつてさ」

「お前……」

「ハハ……実は俺もお前と同じ 鬪う氣だつたんでイ」

「…………やつぱりお前気に食わないアル」

「え？」

「自分ばっかり…… 自分一人で考えて 自分だけそんなに頑張つて…… カツコつけようとしても そうはいかないアル！私も仲間に入れるアル！！」

「…………なに偉そうな事言つてんだア クソガキが…………俺たちはもう仲間だろ？」

そう言われた神楽は、ニッと笑つた。

「お前にガキ言われたくないアル！」

「いっしこそだ」

「もう 夕方ネ そろそろそこに行くヨロシ でも私も着いていく
アルヨ 着くころにはもつ日は沈んでるヨ」

「おう」

「行くヨ[定春]」

「わん」

二人と一緒に万事屋を出た。

そして沖田の刀のある刀鍛冶へと向かった。

そのころ銀時たちは。

「あー いてえ」

「まったくだ 僕なんか一発 ンタマに当たつたぞ」

「え？ 銀魂？」

二人は元気そうだった。

神楽たちが歩いていると、子供たちが普段より多いことにして振づいた。

「今日なんかあるアルか？」

「ああ 今日は祭りだな」

神楽が定春から飛び降りた。

「祭りアルか！？マジでか！！新八のバカヤロー！金お前が持つて
んだろうーがア！！」

「行くぜH」

「……」

神楽はショボクれながら定春に乗った。

日が暮れかけたころ、神楽と沖田は刀鍛冶に着いた。

「あ 沖田さん ちょうどできましたよー！」

神楽は入り口で待っていた。

「おお」

【スッ……】

「つかーさーひに撃くなつたよつな……」

「それなら瓶でも何でも切れるさ」

「ありがとういざこまさん 感謝するぜ」

「これからどうへ?」

「ああ うちの局長を迎えて行くだけよ」

やつして沖田は刀鍛冶から出た。

「できたアルか?」

「ホレ」

「じゃ 行くアルか?」

「だれが行くって言つた? とつあえず また明日だ
ら起きてろよ 朝早く行くか

「もちろん」

「じゃな」

「ウン」

そうして二人は別れた。

沖田が人混み見えなくなるまで神楽はその背中を見ていた。

「…………帰ろっか定春！」

「わん！」

神楽は万事屋に帰った。

そして夜が明けた。

「昨日以来 姉上も神楽ちゃんも誰も見舞いに来ねーよ チクショ
ーーー！」

「おい 静かにしろ 眠れねーよ」

「土方さん！大丈夫なんですか？」

「ああ…………」

「そりいえば 土方さんも誰も見舞いに来てないですね…………」

「…………」

そのあと二人は、ため息をついて布団にもぐつた。

チヨコレートパフ ょつがいものなんてない

神楽は朝早くから超頑張って起きて、沖田を待っていた。

時間は刻々と過ぎていく。

神楽は早く起きすぎたと思つてはいたが、もう巳の刻を過ぎようとしていた。（巳の刻：現在の午前8時くらい）

「おっそいアルネ……朝早く来るつて言つたから超早く起きたのに
アイツ来たらぶつ殺すネ」

神楽はイライラしながら待つていた。

「そもそも何であいつの言つとおりにしてるアルか私 バカらしい
ネ 寝てよかな」

そのときだった。

『ピンポーン』

万事屋のインター ホンが鳴った。

神楽が走る。

「おせんせん！…女心を弄んでそんなに楽しいかアアアアア！ボケ
エエエ！」

神楽は玄関に怒涛の飛び膝蹴りをぶつ放した。

【ドガシャアーンー】

「ゲホッゲホッ　ふははは　やるな娘」

「……　すんません間違えました」

「待て」

「おっと　お前一昨日のやつアルな　銀ちゃんにいやった？　教えなことその角へし折るべ」

「わしは知らんな　わしの目的はただひとつ　その妖刀星碎のみ」

「何を勘違いしてゐるか知らんけど　これは銀ちゃんが修学旅行で行つた洞爺湖で買つただだの木刀ヨー。」

「隠しても無駄といつもの　この前手を合わせた時のことを忘れたか」

「この前つて私はこの刀で何かしたアルか？」

「一振りで橋を両断する力の力　まさしく星碎　わしの思った通りだつた」

「ちがうネー　あの時は私の力で……」

「その細い腕のどにそんな力があるといつて、それにその衝撃に何故その刀が耐えられる？　ホレ理由を言つてみい　ん？　何故だ？　違うところのなら言えるのだろう？？」

「ぐつ…」

「それが星碎の証拠だ」

岩慶丸が神楽に襲いかかろうとした時だった。

「まてえ！」

【ガキン！】

岩慶丸はすかさず剣を抜き受け止めた。

「ぬう…」

岩慶丸に斬りかかったのは沖田だつた。

「こりや何事でえ」

沖田が周りを見渡す。

「遅いアル！何してたアルか！」

「ワリイ 寝坊だ」

「あー？てめえ 自分で早く起きひ言ひときながらそれアルかア？
自分で言つときながら寝坊アルかア？いい身分だな コルア」

「あー？悪かつたって言つてんになんだそりや こちとら てめ
えと別れて帰つてから バカ隊士たちの相手してて疲れてんでイ

「何をもめるか知らんが この前は油断したのみ 今ならわしが負けることもなかろう クソガキが一人になったところでどうも変わらんわ」

「あ、う！？？」

「だれがガキじやあ しかもガキの前にクソ付けやがったなア このいつはともかく オレア違エーデ」

「んだコルア やんのかオウ？」

「早速仲間割れか わしはガキの喧嘩を黙つてみていられる大人ではないのでな」

【シャツ】

「……」

【ガキン！】

岩慶丸が振り下ろした剣に沖田が刀で耐えた。

【ギチギチ】

「ほう なかなかの反射神経じゃないか

「いきなり襲つてくるのは大人がすることかい」

「わしと闘つつか 無駄だわしの体はそいらのクリスタルよりも硬い」

「へえ そこまで硬いんだつたら 僕の刀で試【ド「ッ】しぶア！」

「ぬぐおー..」

【ド「ォン】

沖田と岩慶丸は神楽の蹴りで2階の万事屋から下に落ちた。

「一人で戦おうとしてんじゃねーよ 私にも殺らせろオオオ！」

神楽が飛び降りてきた。

【スタッフ】

「そいつは私の相手ネ 手出すんじゃねーよ」

「強がつてんじゃねーガキが 前にやられかけたって聞いたぞ」

「んな」と誰に聞いたんじゃ ワレエー..」

「お前んどこのワン公」

「犬と会話できんのかテメーは！」

「あら言つてなかつたけか そりやすまねえ 僕は動物と話す」と
ができんだ」

「何者アルか　お前エ！！」

「悪いがガキと一緒に遊んでいる暇はない」

岩慶丸は神楽に向かつて跳んだ。

「だからガキじゃねーって」

【デコシ】

神楽は岩慶丸を蹴り上げた。

「グハア！（だがぬるいわ　この程度で　）」

「言つてんだろオオオオオオ！…」

「（何だとオオ！？あの一瞬でわしの上にイイイイイー…）」

「うアアアアアアアア…！」

「（予想外だった　だがやはり甘い　その刀でわしを斬りつつこうのが間違っている）」

「うアアアアアアアア…！」

昨日　刀鍛冶にて。

「ありがとう」「ゼコモウ 感謝するぜ」

「これからどうへ？」

「ああ いつの回廊を迎えて行くだけよ」

「じゃあ その刀……」

「あ？」

「その刀をもつて行く前に 約束してくれ」

「なんでも？」

「白炎龍そいりゅうで人を斬るときは誰かを護るときにだけにしてくれ」

「…と言ふますと？」

「私の刀のモットーは “護る剣” なんだ」

「……へつ わかったよ…… 鉄子さん あんた良いモノ持つてん
じゃねーか」

「え？」

「じゃーな 感謝してるぜ」

「（鉄子さん……俺は今誰かを護るつてわけじゃねえ　だけど……）

「

「？」

「…? 何してんアルか!…?」

「ウハアー。」

沖田は刀をしまご、そのまま空中で体を反転させて蹴りをかました。

【ガンー】

「甘いー。」

【ザツー】

岩慶丸はすぐに体勢を直し、落ちてくる沖田に斬りかかるつとした。

【ハッー】

そこを神楽が足払いをした。

「何が甘いだーお前は銀ちゃんか!」

【デサツ】

「【デサツ】っ……助かつたぜ　チャイ【ガンー】な、アー…」

神楽が沖田に向かつて石を投げた。

「テメーはテメーでなんで止められねーんじゃボケエー！」

「……（口）こんなヤツにいえた義理か！…）」

「やはり人間は甘いヤツばかりだな その甘さが命取りだ」

「情がないヤツよりましネ！」

「わしに情をかけたといつのか？それが命取りだと言つとむ ちなみに教えてやるつ あの一人はわしらに捕まつた」

「…？」

「なに言つてやがる お前」

「もうすぐ死刑にされるだる」

「「「△クツー」」

その言葉に神楽と沖田は反応した。

「銀ちゃんが…？」

「近藤さんが…？」

「「死刑？」」

「安心せよ 主らもすぐ死んでしまうのと云ふと逝かせてやる

「銀ちゃん返すアルウウウウーーー！」

【バーバー ドーナツズドードー】

神楽のパンチとキックが交互に破裂。

「グアアアー！（なんだこの力は！？人間のものじゃ……ってアレ？
あの透き通るような白い肌 そしてあの傘……夜鬼オオ！あれ夜鬼
だアアー！あれ？じゃああの刀本当に星碎じゃないのー？）」

「ひひあああー！」

神楽がさらりに殴りかかるとしたその時だった。

「待て」

沖田がそれを制した。

「俺に任せろ」

「オイ ちよ」

「任せろって言つてんだ ちつたあ信用しろ

「なんだ またお前か

「（鉄子さん 僕は今護るもんができるぜ）」

「その刀でわしを斬れるものか

岩慶丸は腕で身を護つた。

【ザンシー】

「かつ……！」

岩慶丸はうつ伏せに倒れた。

〔一サア〕

「うおおー」というか銀のせんみたいなこと語りてんじやねーよ」

おーい
行くぞチャイナ

お前なにアルかその万！カツケー！」

早く行かね」とあの一人死刑にされるせ

「何してゐる川か 早く来る川！」

神楽はいつの間にか沖田の前にいた。

まつたく ガキガ 【ズキッ】 ぐつ

沖田は自分の足を見た。

「…チッ（足挫いちまつた やつきの蹴りと着地のときだな…）」

「オイ！早くするアル！」

沖田は平然と歩いていった。

風邪の時は首の周りにネギを巻かれていたが、全然治らねーじゃねーか嘘つき

大江戸病院

「土方さん 暇ですね」

「……」

「あれ？ 寝てるんですか？ 起きてますよね？ 土方さん」

「うひむせーよ 寝むれねエじゃねーか」

「……早く治るといいですね」

「んだ てめえ ハラ 情けでもかけよつてか お前こんな怪我すぐ治してや……【ピキッ！】 グオアー！」

「ああーまだ無理しちゃいけませんってーちょ 大丈夫ですか！？」

「おおお 僕は しし 真選組 ふふふふ 副長 ひひひひ 土方とととと十四郎だだだ」

「土方さんが壊れたアアアーちょ 大変だアアアアー土方さんが！ 土方さんが！」

新ハが騒いでいると、隣のベッドの男が起き上がった。

「うひむせーなあ 眠れねーだろ」

「あーすこませ……あー」

「あーお前は万事屋の……」

「長谷川さん…どうしたんですかそれ…しかもまた同室だし……」

「おうよ それなんだが お宅のお嬢ちゃんとワソナちゃんが『コレなんか人をいきなり轢いてきたのよ』

「神楽ちゃんですか……」

「まつたくよ……俺がパチンコで負けた矢先にこれだからな……」

「またパチンコですか もう止めたらどうですか セツカグのお金もみんなパーにするだけでしょ」

「わかつてゐよそんなこと……でもな 何故か俺の体がパチンコを求めるんだ だがいつも負ける ククク…それに最近氣づいたこともあるんだ」

「なんですか?」

「“負”^マけて初めて“ダ”メだと氣付く“オ”ト^マ…マダオだつてことをさ」

新八は目をそらした。

「イテテ……あれ?ちよ ハレ ヤベッ 動けな……【ビキキッ】
あ、つ……!」

「え？ ビーツしたんですか？ 土方さん」

「ちよ アバラがなんか……」「ハー！」

「あやあああー血吐いた！ 土方さんーちよ 誰かー誰かアー！」

「ナースコールだ！ ボタン押せー！」

「は はー！」

大江戸病院は朝から大騒ぎだった。

そのころ神楽・沖田はすでに玄武族の城（大使館）に着いていた。

「あー門が直つてゐアル！」

「やつぱつお前がこの門壊したのか」

「モチロンア」

「さて……これから近藤さんと田那を救出に行くぜ」

「死に行くようなものじゃなかつたアルか？」

「まあ そんなこと言つてられないだろイ の人たちが死んじまつてからじや遅いからな」

「お前 死ぬことしか話さないアル そんな話して何が楽しいアルか ポジティブヨ ポジティブ精神が大切って銀ちゃん言ってたヨ ネガティブなこと考えてたらいつか本当に死ぬアル」

「そりゃい 僕ア いの一番にお前に死んでもらいたいがな」

「オイコラ もうきまでとは一変してそれかア やんのかコラー..」

「.....」

「おい.....」

「何があつても俺とはぐれるなよ それとこんなことも今回だけだぞ」

「わかつてゐるアルよ」

「（くわ.....ストレスのせいか 自分の感情がコントロールできなくなつてらア 何よりも体が鉛のようにダリイ.....）

「（.....やつぱり 最近のコイツおかしいアル.....）

神楽は思い切つて聞いてみた。

「どうしたアルか 最近お前変アルよ 体調でも悪いアルか？」

「.....俺の心配するんじゃねエ お前に情はかけられたくないねえ

「やつぱり どつか悪いアルな.....顔赤いヨ」

「（……まさかとは思つてたが、やはり風邪だつたか……ヤツらバ
力隊士たちの世話役がこんなに大変たア思わなかつたぜ、近藤さん
も土方のヤローも毎日あんなことやつていたのか……早く助けださ
ねエと、あの人がいなくなつたら真選組はダメになつちまう）」

「風邪なら首の周りにネギ巻くと意外に治るアルよ」

「バカヤロー、ありや迷信だ」

「帰るアルか？」

「バカ言つんじやねエ、それじゃ近藤さんたちが……」

「少し休もうエ、それじゃ本当に死ぬアルよ」

「情をかけるなつて言つたろイ、行くぞ」

「待つアル！少し休んだほうがいいアル！」

沖田は歩いて修復された門を開けた。

「倒れても知らないアルよ！」

「倒れねーよ」

沖田はこの時点で、足を捻挫・風邪・ストレス・重責などで体も精
神もボロボロだった。

少し歩いただけで息遣いが荒くなる沖田を、神楽は心配そうに見て
いた。

入り口の門を開けると、早速玄武続の隊士が待ち伏せをしていた。

「なにヤツ！」

「お前らは……この前のヤツだな？ 今ここで成敗してくれる！」

「まったく天人は同じ顔ばかりで気持ち悪いぜ……そこをどけ 僕たちはテメエらなんかに用はねエ！」

「ふん 二人で何ができると言つのだ」

「待て あなど 悔るな この二人は尋常じやない強さだぞ」

「チャイナ 僕ア今 体動かしたくねーんだ 賴んだ」

「頼まれたらなんでもやるのが万事屋ネ 任せな

「小娘一人だと？」「ケにしやがつて……殺れヤエ！」

玄武族が大勢で襲つてきた。

「ほあちやあああああー！」

【ドゴゴゴゴー・ズドー】

「邪魔アルウウウ！」

【ズドードードードー】

「グア！」

「ギャア！」

神楽は次々と玄武族を倒していった。

「今度は手加減しないアルよオオオオーー！」

5分もしないうちに、数十人の玄武族を倒してしまった。

「ほ……」

「こいつあ すげえや」

沖田の言葉に神楽は驚いた。

「えー？」

「こいつだけ角が二個あらア 新種か？」

「…………何してるアルか 先行くアルヨ」

神楽は歩いて行つた。

しかし沖田が着いて来ないのに気付いた。

「どうしたアル？」

「あ ああ すまねエ」

沖田はフラフラ歩いていった。

「本当に大丈夫アルか？」

「大丈夫でイ」

「ぜんぜん大丈夫そうじやないアルよ」

「俺の心配ばかりするな それより助かっただぜ」

「……足手まといに感謝されても嬉しくないアル 動けないなら外で待ってるヨロシ」

神楽は前に進んだ。

沖田も負けじと歩いた。

足が痛いそぶりなどしないで。

「……借りは絶対エ返す^{せって}」

神楽が倒した玄武族はあれが全員らしく、その後の戦闘は一切なかつた。

「……不気味だな…あれから誰も襲つてこねエ」

「私に恐れたアルよ！男はみんなビビリネ！」

「はあ……ガキは元氣でいいよなア」

その時だつた。

前から一人の大男が現れた。

「こんなところに居たか

「ん？ お前らがここに居るところ！」とは岩慶丸は死んだか？」

この前の茶吉尼の、狼鬼・鬼雲だ。

「あの玄武族なら俺が倒したぜ」

「そりゃ それは良かつた」

「なに？」

「あの男は邪魔だつたのでな わしらが手を汚さずには済んだわ」

「お前ら仲間だつたんじゃないアルか！？」

「仲間？ フハハ 笑わせるな そんなものわしらに必要ない」

「わしらには 力と金さえあれば他に何もいらん」

「最低なヤツらだな……」

「さて そここの小娘の腰にあるものが妖刀か」

「狼鬼 一発で仕留めるだ！」

「御意」

「今度ばかりは見てられねエな 僕も闘うぜ」

「無理すんなヨ」

「へつ 大丈夫だ」

「鬼雲 参る!」

「狼鬼 参る!」

狼鬼の槍が壁を貫く。

【ズドオン!】

鬼雲の金棒が城を壊していく。

【ドゴオオン!】

神楽と沖田の死闘が今始まつた。

【電話で連れてくる鬼はまだそこまで鬼に金棒

玄武族城内牢獄

【ジョオノー】

「何だこの顔はー?テロかー?」

「こや……違うな感ひりへーの音は あいつらがいたよ

「トシたちかー?..」

「ハツ 情けねーなア 結局このまま俺たちが足手まとことなって
んじやあ あいつらに会わせる顔がねーぜ?」

「やうだなア」

「いのままで だまつて一人仲良くジッと待つても仕方ね
H おこげつ やることはわかつてんだろーなあ

「うるせー

「「」」

【ズ、ルンー】

そのころ神楽たちは茶吉尼相手に好戦していた。

「つりやあアアアアア！」

【ドガーンー】

「だアアアアア！」

【ガキンンー】

「銀ちゃんを……」

「近藤さんを……」

「返せHHHHH……」

【ドオォンー】

「くつ……（^{はや}疾い！劍筋が読めん！）」

「（でたらめだがこの夜鬼の小娘強い！）」

鬼雲と狼鬼は顔をあわせた。

「（）じや分が悪い悔しいが行くぞ」

「つむ」

一人は走つていった。

「待て！」

「追いかけるアル！」

鬼雲・狼鬼を追つて神楽と沖田も走り出した。

しかし。

「ぐアッ…！」

沖田はその場に倒れこんだ。

「どうしたアルか！？」

「いや なんでもない こけただけだ……痛つ！」

「足 見せるアル」

「おー よせ… 黙れヨ【ガン】イテ！」

神楽は沖田の足を見て驚いた。

「すごい腫れてるアル！ それどうしたネ！？ 何時からアルか！？ ずっと我慢してたアルか！？」

「大丈夫だ 行くぜ」

沖田はスタッフ歩いていった。

その歩き方は、異常だった。

「お前……」

「気にすんなって わざわざと来い」

「……本当に何が起つても知らないアルよ……」

しばらく時間をかけて階段を上ると、扉がひとつあった。

「さっさからまつすぐの道だったからこいつが……」

「待ち伏せしているかもしれないネ」

「いや 近藤さんと田那を人質にしてるかも知れねエ」

「どうしてやる気はないといふ？」

「わかつてんなら早いやせ……」

【芝居】

神楽は扉を蹴り飛ばした。

「ぶつ殺ス」

一人が怒っているのには理由があった。

鬼雲たちが逃げる数分前)。

「おぬしら なぜまたここに来た!?」

「銀ちゃん助けるためアル」

「ほんなん力でか? フン 笑わせてくれる」

「悪いが お前ら何か相手にしてられないんで工 倒し 近藤さんたちを助ける 退けよ」
俺たちは魔王を

「…ククク 馬鹿なヤツらめ…」

「なんだと?」

「やつらは処刑された」

「嘘をつくんじゃないね」

「嘘だと思つのなら ローブを見ろ」

鬼雲は懐から血がついた銀時の羽織の切れ端を出した。

「 「…」 「

「ああ あと二んなものも持つてきた」

狼鬼が取り出したのは、腕だった。

「うちは「コリのだつたな」

当然、それは近藤の物ではなかつた。

しかし、鬼雲・狼鬼の行動は二人の逆鱗に触れてしまつた。

「返せ……」

「ん?」

「銀ちゃんを……」

「近藤さんを……」

「返せエエエエーーーー！」

神楽と沖田の最終決戦が始まつた。

神楽が蹴り飛ばした扉の中には、鬼雲と狼鬼ともう一人いた。

「フン 来たか」

「うじでなら楽に動けると言つもの」

「そしてこの方が魔王と称される 豪菊王様だ」

魔王と呼ばれるにも納得というぐらいの体の大きさで、3メートルほどあった。

「ハハ…笑っちゃうな テカすぎだぜ」

「お主ら ここに何をしに来た?」

「近藤さんたちを助けに来たつもりだったが今は違う……お前らをぶつ殺しにきた」

「フハハハ なかなか息の良い小僧だ 鬼雲 狼鬼 任せたぞ」

「御意（鬼雲…約束通りあの小娘を先に倒した方が星碎を手に入れるという事でいいんだな）」

「うむ 行くぞ！」

鬼雲と狼鬼は一斉に神楽に飛び掛った。

「（しまった！ヤツらはチャイナの木刀しか目に入つてねエ！…）

「うおー！」

神楽は上に跳んで避けた。

「かかつた！」

魔王が金棒を振り上げていた。

「誰が闘いを放棄すると書いた?」

「……」

「ヌンー。」

神楽はとっさに天井に捕まりなんとかしおぎ、下に降りた。

「危なかつたヨ。」

「チャイナ 僕があの二人をやる お前はあの魔王だ」

「……わかつたアル」

神楽と沖田は左右に走った。

沖田は足を半ば引きずつて。

「つおおおー。」

「ヌウー。」

【ガキイン】

「鬼雲悪いな 僕は小娘の相手をしてくる」

「狼鬼イイイイー！」

沖田の眼が狼鬼の後姿を捉えた。

「逃がさね！」

一瞬だつた。

いつの間にか沖田は狼鬼を斬っていた。

【ズウウンー】

「なに！？（なんだこのガキ……動きがまったく見えなかつた！！！
ワシと対峙していたあの状態からそんな……ありえん！－！）」

「あんま体が持ちそーにねエんだ サッセとケリをつけろぜ」

「ぐ……オオオオ！」

「死ね」

【ズバンー】

「グアアアア！」

【ドスウンー】

「ハア ハア ハア」

沖田は片膝を着いた。

「痛つてエ 足……終わつたな」

神楽と魔王はほぼ互角に対峙していた。

「ふんがああああ！！」

神楽が金棒を持ち上げる。

「ん? どうした? 夜鬼の力はこんなものか?」

「お前がお前だなー。」

「フン！」

魔王は金棒を上げた。

11

それと同時に魔王の拳が神楽に直撃した。

【ドグツ！】

「グア！」

【ドオオン！】

魔王はその体に似合わず素早かつた。

魔王は神楽を殴つたと同時に地を蹴り、神楽に襲い掛けた。

「チャイナ！」

「まざー近」

魔王は金棒を振り下ろした。

「……………ん？」

神楽が目を開けると、そこには金棒を刀一本で耐えている沖田がいた。

「おお前ー！」

「チャイナ……お前は俺が絶対エ護る 絶対エ死なせねエ！」

家に帰るまでが遠足 生きて帰るまでが戦（前書き）

読者の皆さん、これまで本当にありがとうございました！

先日、自家用PCが故障、原因もわからず長期放置してしまいました。そのため長期にわたり投稿する事ができず、もしも楽しみにしていただけた方に申し訳ない気持ちでいっぱいです。

これからもそんなこともあるかも知れませんが、その度お詫びをさせていただきます・・・。

家に帰るまでが遠足 生きて帰るまでが戦

「チャイナ……お前は俺が絶対に譲る」

「お前……」

「絶対死なせね」例え……この体が引き裂かれても 足をもがれても この腕が この刀がある限り お前は俺が必ず譲つてやる……もう誰も触らせね」これ以上 俺の目の前でお前が傷つくのは見たくないね」

「……！ な……なに言つてるアルか！ もう止めるアル！ 私はまだ動けるからー無茶しないでーもう少しつつ体ボロボロじや」

「じりねーよ んなこたア！ だがなあ 田の前で傷ついていくお前を 惣れた女を譲れないんじやあ俺は男として失格なんだよ」

「えつーー？」

「何を！」チャビーフンー」

魔王の鉄拳が沖田にモロに当たった。

【アラシ】

「ぐおー」

「ーー」

【ド「オノン！」】

「がはつ！」

「ああ！」

神楽は沖田に駆け寄った。

「大丈夫アルか！？しつかりするアル！」

「ゲホッゲホッ！油断…大敵…つてか…情けねー…結局俺は役立たずだつたな……『』エ！」

「……おい！しつかりするアル！おい！」

「ハー…ハー…やつべえ…意識が…チクショオ…馬鹿だな俺ア…最期は…こんな形になるなんてな…」

「なに言つてるアルか！しつかりするアル！」

「魔王相手にお前一人で勝てるのかよ……言つたら 死に行く様なもんだつてさア……ゲホッ まあ言つた本人がコレじゃあな…」

「…大丈夫ネ」

「…？」

「今度は私が護るヨ ……つらいんだもん 私の好きな人がこれ以上傷つくのを見てるのは……とつてもつらいネ だつてお前は本当は強いのに こんなやつらに負けるヤツじやないのに」

神楽は少し涙ぐみながら言った。

「……バーカ　お前があいつに勝てるかよ…… さつさと涙拭いて逃げろよ」

「逃げないヨ　だつて逃げたら私は女として失格ヨ　また……一緒に遊びたいから」

「……どうやら　それは無理らしきぜ」

魔王は自慢の金棒を振り上げた。

神楽は沖田の前に立ち塞がつた。

その時。

【ド、「オオーンーー】

「　「「うおオオオオオーーー」」

「な　なんだー!?」

沖田と神楽は目を丸くして驚いた。

「銀ちゃんーー！」

「！」…近藤さん・・・・・」

「何だお前ら　ワシの相手をしに来たのか　茶吉尼も倒せんかった

ヤシラが束になつたところで ワシの相手になるものか……」

「神楽 洞爺湖貸せ！」

「総悟 刀を貸せ！」

「あ…はー!銀ちゃん!」

「（護る剣…）近藤さん！」

【パシ！】

「魔王だかなんだかしらねーがなアアアーーー！」

「俺たちの仲間に手を出すやつはなアアアアアアアア！」

「絶対許さねエエエエエー！」

「ぬおオオオオオ！」

魔王の振り降ろした金棒より疾く、銀時と近藤の刀が魔王をぶつた
斬つた。

【ブシィイイイ！】

「なんだと……ゴハツーあ……ありえん……」のワシが……魔王と呼ばれた……この……ワシが……この様な……人間などに……くぞおおおお……！」

【ズウウーン】

「総悟ー!どうしたその様は!/?大丈夫か!/?」

「待たせたな神楽 悪かつたなこんなところまで来させて」

「トシや新ハ君はどうだ?まさか…」

「…違うまさア あの二人は大怪我で動けねーから置いてきやした」

「神楽とお前 一人だけで来たのか!?」

「そうだヨ 銀ちゃんたちが心配だつたから私たち一人で来たん

」

【パン!】

沖田と神楽は一瞬なにがあつたかわからなくなつた。

近藤と銀時が一人の頬にビンタをしていた。

「バカヤロー!あの時どんな思いで俺たちがお前らを逃がしたと思つてんだ!」

「助けに来るなんて思つちゃいなかつたぜ俺たちは 実際にうやつて簡単に出れだしな」

「なんだヨー 銀ちゃんたち 嬉しくないの!?」

「……無茶して欲しくなかつただけだ ありがとな神楽」

「すまなかつたな総悟」

「…………」

「せひ もうあとで行へや」

「わあ 帰りやー。」

4人は並んで帰った。

「あ でも「レジ付するんで」近藤さん」

「え?」

「せうこや お前ら怪しげ動きしてたから来たんだよな?」

「これじゃ 真選組と私たちが怪しげ動きしたヤツらネ」

「あー 松平のとつあんになに言われるか…近藤さん」

「いや 幕府からだり 「コトハ」

「男は黙つて切腹ヨ 「コトハ」

「ちよつちよつ なに? 全部俺の責任か?」

「当たり前だろ なんたつて局長だからな」

「先陣切つてたヨー。」

「近藤さん 葬式はパアツとやりますんで 安心してください」

「総悟まで何を… 嫌だよヤダヤダ！嫌だアアア！俺はまだ死にたくないイイイ…じつせ殺されるならお妙さんに殺されたいイイイイ…！」

この後、松平のとつあんのところに行つた近藤は事情を説明した後、命の危機にさらされたが、お登勢や神楽などの証言でなんとか松平のとつあんが幕府おかみに話をつけてくれて、首の皮一枚のところで助かつた。

今回の一件で、真選組は副長の土方が長期の入院、沖田が足を全治2ヶ月のヒビで長期の自宅安静。

万事屋では、新ハが全治1ヶ月で入院、神楽が軽い怪我で全治2日。万事屋にとつても真選組にとつても、かなりの痛手だった。

ただ、この事件の後、あるプチ事件が起るるのである。

家に帰るまでが遠足 生きて帰るまでが戦（後書き）

かくして、今回の『銀魂 魔王襲来篇』は終わりました。

ここまで読んでくださった方には感謝の気持ちでいっぱいです！
ありがとうございました。

えー、そして次は『魔王襲来篇』のオマケの様なものなので、グタ
グタな感じでキャラ崩壊している感じです。それでも見ても良いか
な…と思う方は、この次を！

期待はしない方が良いと思います……、w、

遠いものまじめ（前書き）

ここからは、神ノ沖が中心の物語。
単数話で編成される作品です。
果たしてどんな結果が待つか？

遠いものほど愛しき

大江戸病院

神楽と銀時は、新八の見舞いに大江戸病院を訪れていた。

「新八ー！元気アルかー？」

そこにはベッドで寝ている新八とその姉、お妙が一緒にいた。

「あら 神楽ちゃん来たの それに銀さんも」

「新八は？」

「今は寝てるわよ サツキまで起きてたんだけどね よっぽど疲れてたのかしら 私が作ってきた栄養たっぷりの料理食べたらすぐに眠っちゃって あ そうだ 私新しい料理にチャレンジしてみたの ～それを新ちゃんと食べさせてあげただけど…コレ どう？神楽ちゃん達も食べるわよね？」

よく見ると、新八は口から泡を吹いていた。

それを見た銀時と神楽はこの超暗黒物質的物体を食べたら新八のよう死んでしまうことを察した。

「いや 僕はもう食べてきたから遠慮するわー」

「あらあ 残念だわあ 神楽ちゃんは？」

「私もアル！ 食べ過ぎたアル！！」

「神楽ちゃんも？ せつかく作っててきたのに……」

「そうだ 勿体無いからお前が食べたらどうだ？」

「え？ 私？」

「そ そつアル！ 姉御 新八の看病で疲れてる山一。」

「私はいいわよ 今は食べたくないもの」

お妙がそう言つと、新八のベッドの下から近藤コトリが現れた。

「お妙さんがせっかく作った料理を食せないとはお前にどうこういふことだ！ 一体どんな育てられ方をしたのか 親の顔が見てみたいわ！ ねえ！ お妙さん！」

「それはこっちのセリフだよーーんのゴリラがアアアーーー！」

「あぎやあアアアアアアーーー！」

：近藤 熱全治2日：

その時、松葉杖をつきながら、沖田が土方の見舞いと称し、動けない土方のもとにやってきた。

「ん？」

「お？ よつ 何の用だ？」

「田那たち」そ 僕は土方さんの息の根を… 「ホン…あー のど の調子が悪いや 見舞いに来ただけでさ！」

「違つよね のど の問題じやないよね 今息の根をどうとか言つてたよね」

「田那 それはきっと幻聴ですか 僕 良い耳鼻科知つてますぜ紹介しましようか？」

「いや幻聴じやねえって 僕の耳は正しい」

沖田はふと神楽の方を見た。

神楽は沖田と田を合わせようとしたしなかった。

「……ああ 新ハ君も土方さんと同室なのか

「おーい【ペチペチ】 新ハ～【ぺんぺん】 起きひし～…………【パン】」

しかし新ハは起きない。

「新ハ～もう一発行くか～」

「ダメよ神楽ちゃんー。もつと強く叩かなきゃ…ね！【スペアーンー】

L

しかし新八は起きない。

「今まで そんな荒々しい起こし方じや起きるわけねーだろ 俺に任せろ

銀時はラジカセを用意した。

一
はい
ボチツとな

「ジ～～……『みんな～！今日は楽しんで言つてネクロマンサー～！
【ネクロマンサー～】じやあ一曲田～。『お前の母ちゃん××人～！』
ジャジャジャーン ジャジャーン お前エそれでも人間かア～！お
前の母ちゃん××人だアア～！」

【ひくつ！】

寺門通の『お前の母ちゃん××人だ!』を聞くと、新八が反応した。

「ネクロマンサアア―――！」【ガバアア！】

「『ラ』新ちゃん 病院では静かにしてなあや【『シ-】 やんと寝てないじダメでしょ【『シ-】」

ネクロマンサーと叫びながら飛び上がった新八にお妙の拳骨。

さらに止めに一発。

「お姉さん 新ハ君！」 永眠したんじゃないスか？」

その時、銀時たちの前を沖田が通つた。

「じゃあ田那方 僕アこれで……」

「おお じゃあな」

銀時は、ふと土方を見てみた。

「フ、ツー！」

土方の顔には白布が乗せられ、胸の辺りで手を組まれており、その周りには大量の花があった。

「銀ちゃん…」

「ああ…？ プチッ」

「うょっと私 売店へくるネ」

「ああ 言つて来い言つて来い プクク…」

銀時は声を震わせながら言った。

「あら神楽ちゃん じゃあ私も……」

「姉御 いいアル！ ちょっとつこでに用もあるアル！」

「あいつ…？」

神楽は走つていった。

「これ線香たいたらもつといいんじゃね？イクね？これイクね？あ
そ уд ареあの叩くとチーンつてなるやつ置こうぜ」

【ガ一】

神楽は病院から出て、敷地内の庭を見渡した。

「ん？」

庭のベンチに松葉杖が置いてあった。

そのベンチに神楽が近づいた。

「……これ あいつのアル」

神楽はもう一度、あたりを見渡した。

すると、庭の中で一番でかい樹の下に沖田が立っていた。

神楽は沖田の後ろから、そつと近寄った。

「あいつ…」

辛い嘘より 善い本音（前書き）

沖田を追つた神楽の取つた行動とは！？

辛い嘘より 善い本音

「もう歩いてもいいアルか?」

「チャイナーなんでここに...」

「散歩アルよ 足...折れたアルか?」

「いいで済んだよ だがあまり痛みは引いてねH」

沖田はそのまま言いながらも、常人と変わらない足取りで歩いていった。

「.....反省.....してるアル」

「.....」

本当に反省している声だった神楽に気付く、沖田は、ふと顔だけ振り向き、そしてベンチに座った。

「.....まあ 座れよ

「.....うん」

神楽は沖田の隣にちょこんと座った。

そして、その光景を少し離れて隠れながら視聴するものがいた。

「ふふ～ん こうじうのは趣味じゃないが なかなか青春だね～
銀さんうらやましいなあ～」

銀時だつた。

それに気付かず、沖田と神楽は一人きりでいた。

沖田と神楽の前には、先日までの鬪いが嘘の様に平和な光景が広がつていた。

神楽は空に向かつて顔を上げた。

「……今日は良い天氣アルな

確かに、空は快晴、鳥は自由に空を舞い、そして木々が揺れ、葉が揺れ、ざわざわと言つ穏やかな音とともに、涼しい風が吹き通る。

「やうだな……」

しばらく沈黙は続いた。

二人は、どうしてもあの時の会話が頭から離れない。

沖田は「惚れた女」と言い、神楽は「好きな人」と言った。

神楽は自分は本音を言った。

しかしひねくれものの沖田がそんなこと万に一つでも言つだらうか?

しかもあの時は風邪で体調が悪かつた。

神楽はそのことについて触れることができなかつた。

「なあ……」

先に切り出したのは沖田だった。

「ん~?」

変哲もない返事。

しかし沖田は、神楽の予想を覆す言葉を発した。

「そこまで反省するなよ あの闘いは好きで来たんだ しかも助け
てもらつて こいつちが頭下げたいくらいだ」

何も驚くことのない言葉。

しかし沖田の発した言葉であり、それが神楽にはとてもおかしいこ
とだった。

普段は貶けなし合い、殴り合い、敵対意識100%の一人。

相手がこいつになると、神楽はふっと肩の力が抜ける。

「まだ熱引いてないアルか?」

「とつくて引いてる」

「じゃあ……」

「俺の本音だ」

神楽は顔を赤くした。

「……私　あの時助けてもらわなかつたら　死んでたかもしれないアル　それをお前が身体を張つて護つてくれたアル　私…すつごいうれしかつたアル！」

「…………」

「しかも……あんな」と言われて　もつと嬉しくなつたアル

「…………」

「そして私気付いたヨ……初めてお前を見たあの時　お花見の時から　私はずっとお前が気になつてたんだつて　好きだつたんだつて！…！」

神楽は依然穏やかな表情だつた。

「……あのときお前の言葉が無かつたら　こんなこと言えてなかつたヨ……　あの時　お前が風邪だつたからあんなことを言つたのかもしれないけど　私　本当の気持ちに気付くことができてよかつたヨ　……だから　アリガトネ……」

言い終わつた後、神楽はすつと立ち上がり沖田の前を通り過ぎた。

「……氣付いてたよ」

沖田が神楽を引き止めるよつて言ひ放つた。

「え……」

「始めてからわかつてた　お前の眼はあの中で一人だけ違っていた」

神楽と沖田は顔を合わせず、互いに違う方を見て会話は続く。

「流石…アルネ…」

気付かれていた悲しみかどうか、神楽はすこしションボリした。

「俺は　あの時　お前を助けようとした時に気が付いた」

沖田はボソッと言つた。

「え？」

「『ああ…ヤベエな　こりゃ　完全にやられたな』ってな……」

「だから何が…」

「……俺は　あの時も本音だつた……」

神楽はとつせに振り返つた。

「え…！？」

大きな風が吹いた。

「“神楽”！　俺は　――」

風の音で沖田の声が途切れてしまった。

「えー？ 何？ 何！？ ちよ… 聞こえなッ！ もう一回言つて！ ねえ！」

しかし神楽には聞き取れた様子だった。

神楽は笑顔を見せた。

神楽の本音 。

沖田の本音 。

銀時の尾行 。

神楽は本当に好きだと黙つたことを伝えることが出来た。

一方沖田は、本音だつたと伝える。

しかし、沖田が好きだと言つたかは不明である。

あとは、あなたの想像次第で変わります。

……銀さんの話によると、あのあと、『沖田と神楽は互いに身を寄せ合つた』と言つてゐた。

はして、銀さんの言つてゐることは本当なのか嘘なのかな。

完――

「チッ 曜間つからべたつきやがつて……ホントッ！若いつていい
ね！しょーがねえ……戻るとする【ガツー】かッ！？？」

銀時は小石に躓いてしまった。

「（あ……ヤベ……）」

【ドスンー】

「ヤバイヤバイヤバイ！……早くにげ……」

【ザツ】

一人がお怒りの顔で立ちふさがった。

「銀ちゃん……」

「旦那ア……」

「あーああーお一人さんー奇遇ですね アハハハ！あの…………僕何かしましたつけ？」

「いつから？」

「え？え～何のことかな？身に覚えがないや

「じゃあたつた今その身体に叩き込んでやる!!……！」
「じゃあたつた今その身体に叩き込んでやるよ!!……！」

【ドゴッ】

「ぶべらアアー!!」

本当に 完!!

辛い嘘より 善い本音（後書き）

ここまで読んでくださった方、本当にありがとうございました！
本編でも駄作なのに、こんなオマケまで読んでくださって、感謝感
激です！！

本当にありがとうございました！！

余談ですが、感想で【ニヤー助】さんから沖田と神楽くつついちや
えとのかんそうがありまして…（ニヤー助さん！勝手なこととしてス
ンません！！）それで、かなり考えた結果、私メではどうするこ
とも出来ず、最後まで曖昧な形になってしましました。

本当にすいません！お詫び申し上げます！

銀魂 魔王襲来篇 どうでした？

最後に、こんな駄作ですが呼んでくださった方には、大いなる感謝
の気持ちでいっぱいです。
これからもよろしくお願ひします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7349e/>

銀魂 魔王襲来篇

2010年10月10日03時59分発行